

常照

第784号

極樂の鳥

浄土真宗の教えの根本となるお経の中に『仏説阿弥陀経』というお経があります。

『阿弥陀経』といえは聞きおぼえのある方もおられるでしょう。

このお経には阿弥陀仏が建立された極樂浄土のお姿が説かれています。

宝で飾られた樹木の林や建物、

七つの宝で出来た池。色とりどりの花々は青い花は青い光、黄色い花は黄色い光でそれぞれが、それぞれそのままで輝いている・・・苦しみのない極樂の素晴らしい姿が描かれています。

また、極樂には六種類の鳥がいて一日に六回、美しい声で鳴き、その声は仏さまの尊い教えを説いているのだそうです。六種類の鳥はそれぞれ、白鶺・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命鳥（びやつこう・くじゃく・おうむ・しゃり・かりようびんが・ぐみようちよう）と言ひ六鳥と呼びならわされています。

白鶺は、鶴に似た白い鳥で、そ

の白さは極楽の清らかさを象徴しています。

孔雀はご存知の通り、光沢のある羽毛と特に長い後ろ羽が美しい鳥で、これも極楽の美しさをあらわしています。

また、孔雀はその姿に似ず、毒のある蛇やサソリ・毒虫を食べるのだそうです。つまり、私たち人間の煩惱の毒を食べてくれる、仏さまの智慧を象徴しているそうです。

鸚鵡は人まねをしてしゃべる賢い鳥です。

舍利という鳥も人語を解すといわれています。この二種類は、人の言葉で話し、仏さまの教えを説

くともいわれています。

迦陵頻伽というのは、妙声・

好声・妙音鳥などの別名があり卵の中にいるときからよく鳴き、大変美しい声で極楽を荘厳しているといわれています。

共命鳥という鳥は、変わった姿をしています。一つの体に頭が二つ付いていて、まさに命を共にする鳥です。

仏典によると、この二つの頭は極楽に生まれる前、つまり前世では大変仲が悪く、いつも言い争いが絶えなかつたそうです。片方が「右へ行きたい」と言えば、もう片方は「いや、私は左へ行きたい」と言い、片方が「休みたい」

と言えば、もう片方は「もつと遊びたい」というように、事あるごとに対立して毎日のように争つていたそうです。

とうとうある日、喧嘩が高じて片方の頭がもう片方に毒の実を食べさせてしまいました。

ところが頭は二つですが、一つの体を共有していますから、双方ともに命を落としてしまうことになったのです。今まさに命が終わろうというその時に、毒を食べさせた方が大切なことに気が付いたのです。

諍（いさかい）いばかりしてきたが、いつもそばにいてくれた、もう片方の頭のお陰で元気に生き

てこられたこと、片方だけでは生きられないこと、支えられてはじめて生きていたこと。

このことに気づき、深い漸愧の思いが起こったことで、共命鳥は極楽に生まれたといわれています。このお話は大変大事なことを教えてくれているようです。

極楽浄土は青い花は青い光、黄色い花は黄色い光でそれぞれがそれぞれそのまま輝いている、つまり「みんな違ってみんないい」世界。それぞれのいのちがその個性のまま認めれ、認め合える世界ということを教えています。ですから、みんなバラバラでいいということなのです。

と同時に、そのいのちたちは、
単独では生きられない。

「すべてのいのちは、必ず他のいのちと関わりを持っていくこと」
をこの共命鳥の物語から受け取る
ことができます。

身近な存在であればあるほど、人
間の関係は難しくなるようです。

悲しいことに

ここ数年、日本で
起きる殺人事件は
親子・兄弟など
身内の場合が多い
そうです。
極楽の鳥は共命鳥から
大切なことを教えていただくこと
であります。



五月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 五月七日(火)～十一日(土)

北海道教区 留萌組 信樂寺

講師 吉川 昭 恵師

○後期 五月十三日(月)～十六日(木)

北海道教区 函館組 宣法寺

講師 渡邊 龍 誠師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

○浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。

どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院
くださいますよう、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (011-34) 二二一〇七四番
FAX (011-34) 二九一四〇八番
テレホン法話 二七一六一六番